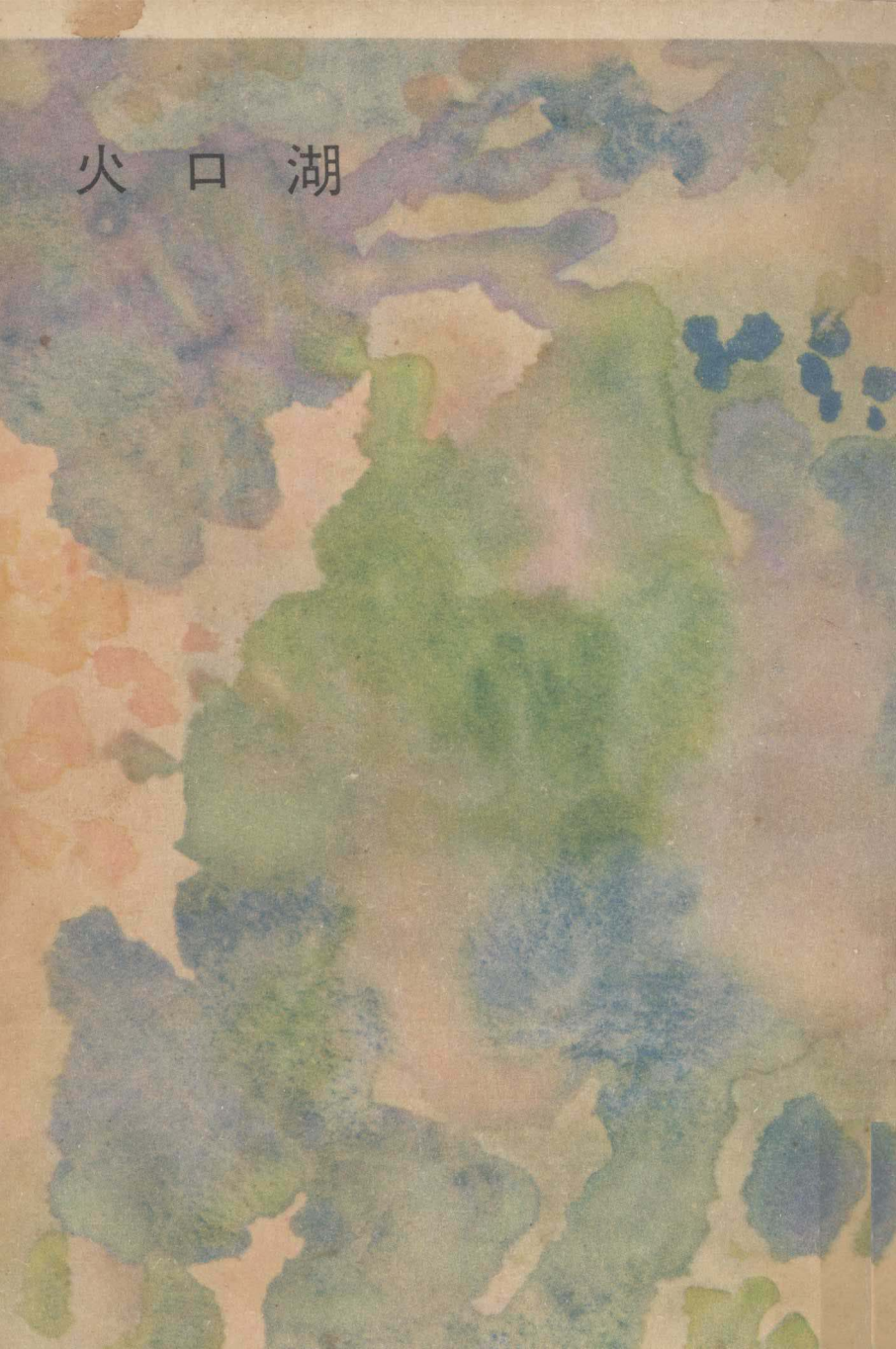


火口湖





湖 口 火
雄 久 野 澤
版 社 潮 新

火口湖

昭和三十四年七月二十日印刷
昭和三十四年七月二十五日發行

定價二八〇圓

著者 澤野久雄

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社 新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京(34)代表七二一―九
振替東京 八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

目

次

東京から
遠い妹
風の中の
おどろき
白い陽
ぶどうの目
くちびる

七

二七

四七

七一

九四

一一六

一三四

羽のように

一六五

フ
ァ
ン
タ
ジ
ー

一八八

離

合

二一八

ど
こ
か
に

二三九

湖

二五九

冬の底にも

二八三

あとがき

二八八

裝
幀

高
山
辰
雄

火
口
湖

東京から

「さよなら」

と、一枝は言った。

「降りるわ」

「じゃあ……」

そこまでは、いつもの習慣どおりであった。車は山王下で、小暗い舗道に寄って止った。が、とびらを開いて降り立つと同時に、

「あら降ってるわ」

新しい皮の草履のつま先が、一瞬、鋭敏に路面のしめりを吸い上げていた。

「降ってる？」

と、驚いたらしい男の聲に、薄いあかりをうけている一枝の、白い顔が静かにわらって、

「……どうりで、車の中から見た町が、今夜はひどくきれいだったわ」

一緒に歩いていたころは、まだ降ってはいなかったから、車を拾ってそこに来るまでの、わずかに十分あまりの内に降り出した雨だろう。なるほど車の窓も、霧がかかったようにぬれている。ぬれているガラスを透して、走りすぎる夜の町並を見ていながら、そのガラスのぬれていることにも気づかなかったのかと、一枝はふと自分が不安だった。

——西さんだって、今まで気づかなかったんだわ。

するとその間は、二人とも自分の體から自分というものを、逃がしてしまっていたことになるだろうか。

こんなことは、今までになかった。

降りかかるぬか雨とはちがう冷たさを、一枝は不意に、えりもとに感じるのだった。九月にしては、氣溫も下りすぎているらしい。

「冷えてきましたわ。かぜ、おひきにならないように……」

「ぬれますよ。こんな時でも、お宅の前まで、車をまわしちゃいけないんですか」

「ええ」

と、はっきり肯いた。それから、かすかな動搖に追われているような口調で、

「そういう氣持があたりだったら、歩いて家まで送ってちょうだい」

「おや、それならかまわないの？」

意外だった、というのだろう。西龍一と一緒の時は、いつも車で送られるから、別れるのは停留所の際だった。それから先の道は、一緒に歩いたこともない。車の中のくらがりで、おどろいたように見開いた男の目が、たちまち新鮮な微笑でゆるむようだった。手早くポケットから、小錢をつかみ出したと思うと、もう路上に降り立っていた。

「はじめてじゃないの。この道を僕に送らせるなんて……」

肩が並んだ。きっちり並んだまま電車通りを折れると、車の往來も少ない静かな通りである。道はゆるやかな、登り坂になる。まだ、宵の口だというのに、人影も閑散だった。落ちついた家構えの商店街がならんで、街路樹のアカシアの葉は、かすかな雨にゆれて光る。その並木

の向うの暗い空に、テレビ塔の紅い灯が高い。

「送って頂くこと、あたし、ちっとも困りはしませんわ。でも車を家まで乗りつけては、御近所の方がなんて言うか……。山王下とうちとの間は、どんなことがあっても歩きますのよ」西はふと振り返って、

「それ、甲州商人の哲學？」

その聲には、いくらかいたずらっぽい笑いがあつた。

「しかし、折角送ってあげても、あなたにかかる雨を防ぐわけにはゆかない。雨具はなし、車はお断りだし……」

——そのくせどちらも、ゆっくり歩いている……。

と、一枝は、思いながら、

「大した雨ではなかったわ」

「冷たくはないの？」

「ぶどうなら、ぬれると値が下るでしょうけど……」

「え？」

「とり入れ前のぶどうが雨にあうと、味がずつと悪くなるんです。うす味になって、あま味がへりますわ。時によると雨をふくんで、ぶどうの粒がはりさけてしましますの」

「……」

「ぶどう園では、收穫期の雨を、とてもこわがります」

「ぶどうでなくたって、餘り雨に當てるのは……」

「あら？」

これも笑いをふくんだ聲だったが、

「ここ、曲りますのよ」

もう、堅い聲になっていた。觸れ合っていた肩がついと離れて、一枝は一足先に、一ツ木通りを右に折れた。

「千倉洋酒店」は、そのかどからほんの十何軒のところにある。間口二間の店の中は、さまざまな酒の反射で、その夜も虹のように輝いていた。

左右の壁は、とつつきにバターやチーズの箱を並べて、それから先は炭酸、ジュースに、洋酒ばかり。突き當りの一間半は、土間から天井まで届く背の高いガラス戸だ。外、高貴の高級酒がぎっしりと並んでいる。けれどもよく見ればそれにまじって、ローマ字で「千倉」と名の入ったぶどう酒のびんが数ダース。――いや、このびんに目をつけるのは、ぶどう酒の本當に好きな客か、千倉工場の仕事を知っている人たちばかりだ。

「ただいま……」

一枝が一足、土間に踏みこむと、

「お歸りなさい」

と、居合わせた店の者が、聲をそろえる。

「なにか、用事はなかった？」

「お宅から、電話があったようでしたが……」

「甲府から？　なに……？」

「波多さんが、聞いています」

「そう。あとで、上へ来てもらつて……。それから、お客様だから、お茶を」

一枝は注意深く、草履をそろえて脱ぎながら、店先にためらつてゐる西に向かつて、

「どうぞ、お上りになつて……」

店の者とかわす言葉と同じように、まだ事務的な聲であつた。

——今ごろ、なんで家から電話がかかつたのだらう？

甲府では、母と兄とが、どうも園とどうも酒工場を営んでいる。赤坂の千倉洋酒店は、いわば自家製品の東京販賣所である。一枝がその店を預かつてから、もう三年以上になる。外交をかねた波多俊吉に、二人の少年と手傳いの少女を置いて、店は極めて順調にいつていた。

「あら、遠慮なさらずに……」

二階の座敷に入ると同時に、一枝の表情は、またふつと柔らいでいた。

「どうなすつたの？ そんな所に立つていらしつて……」

「あなたの切りまわしが……店の人の前では、がらつと様子が變るんで……」

「そんなこと、お驚きになつたの？」

「やつぱり、經營者の才能かな？ 僕なんか、まあ、及びもつかない」

「そんなこと言つてないで、とにかくおすわりなさいな」

八疊の間に、四角なテーブルが置いてある。一間の床を背負うような場所に、座布団を置いて、

「今夜はちよつと、氣負つてゐるのよ、あたし……」

「なぜ？」

「あなたを初めて、この部屋にお通ししたし、なんかあたしの生活にも、變化のありそうな豫感があるし……」

豫感ばかりではない。

郷里の家で、一枝に歸つて來てほしいと言ひ出したのは、もう何カ月前だったろうか。工場は兄が握っている以上、心配はないが、どう園の方は、母親にはすでに重荷になってきている。わずか三町歩だが、甲府郊外の山の傾斜にある畑には、父の代に植えたヨーロッパ系のぶどうが何十種、今年もゆたかに實っているはずだ。

「變るつて、どう變るの？」

西の表情が、ふと緊張したようだった。

「ごめんなさい？ あたしにしては、妙に遠まわしな言い方だったわ」

「……」

「第一に、ここに住んではいられなくなるかもしれない」

「結婚？」

「いいえ」

と、一瞬、自分の目にうかぶはじらいを意識しながら、

「まだあたし、收穫期には少し早いようですわ」

けれども、早いと言ひながら、一枝は自分の言葉に、ふとこだわった。

郷里へ歸れば、その先には、やはり結婚が待っているかもしれない。

「家の方で、手が足りないんです」

と口では言つたが、氣持はその言葉をはなれて、あわただしく崩れおちてゆくようだった。

崩れおちた先に、どんなわなが待っているのか。最近の自分の環境に比べると、郷里まで二時間半の距離が、たちまち何十倍にもなるような気がした。そして、その遠く古めかしい地方では、そんなわなをかけることも、人の善意だと思ふ仕来りがある。

階段に足音がするのを、心のどこかに止めて聞きながら、まだ西龍一の目に見入っている、ふと自分がたよりないようだった。

「お歸りなさいまし」

踊り場に、波多が顔を見せて、ひざをついた。三十をいくつ越えたか、眞面目で商賣熱心な男である。この男がいるから、自分呼びもどしてもいいと家では思っているんだ、と、ちらと心にひらめくものを感じながら、

「家から、電話があつたんですって？」

「はい、急に、大阪へ行って頂きたいそうで……」

「あたしに？」

「はい」

一枝は何ごとが起つたかと、一瞬、見當がつかなかった。

道路に面して開いた窓から、向かいの家の廣告燈が見える。どこかのラジオが、低いうた聲を流している。

一枝は危うく、波多の話にさらわれそうになり、それと氣づいて、あわてて身をさけようとした。

大阪にあるしんせきの一軒を、ちらと思いかべながら、

「お客様なのに、その話、いまずぐ聞かなければいけないの？」

何かが、無残にふみにじられてゆくような気がした。

ぶどうをつぶす機械の中で、大量のぶどうがたちまち押しつぶされてゆく様子が、目に見えるようであった。くだかれたぶどうなら、紅くあまい液體を、ゆたかにそこへ残すだろう。けれども、いま彼女の中で押しつぶされようとしているものは、いったん崩れ去ったら最後、もう、その香りさえ残さず、消えていってしまうのではないか。

女中の運んで来たお茶を、西の前に置こうとすると、

「どうぞ、僕には御遠慮なく。なんなら、このままおいとましてもいい」

「あら、ごめんなさい？」

わずかに見上げる自分の目が、哀願の色を流したと、一枝はひそかに自覺したが、西とまともに顔が合うと、不意につき放されるような頼りなさだった。相手の目が、意外に明るい。波多の出現を迷惑がる様子など、さらにないようである。

それは、西龍一の寛大さであろうか？——一枝は、西と自分との間をへだてて、冷たい水がひとすじ、流れのようにすりぬけてゆくのを、不意に身にしみて意識するのだった。

——今夜この人を家まで誘ったのは、あたしの間違이었다かもしれない。

彼女の中には、さっきの雨がよみがえって来た。歸ってから、一應は乾いたタオルで、えりも着物の肩もおさえたはずだったが、案外、雨ははだの近くまで、にじんでいたのかもしれない。

ふと弱まってゆくような胸のひびきが、彼女を、わずかに波多の方へ押しやった。

「ね 波多さん」